秋田博研報　6号　1～22ページ　1981年3月

なまはげ習俗と仮面

—「東北の仮面」展によせて—

益子清孝・嶋田忠一

はじめに

当館では、昭和56年9月から11月まで「東北の仮面」展を企画している。内容は土面や舞楽面をはじめ、獅子頭・カマド神・番楽面、その他民俗面を含むものである。民俗面と称されるものは、舞楽面や能面などにくらべれば稚拙さをまぬがれないが、洗練された仮面にはみられない素朴さや仮面というものの意義を知る上では好材料と言えよう。その意味では今度の展示は、単に名品と比較するだけにとどまらず、面とは人間にとって何なのか、といった、より本質的な問題を提起してくれるものと期待している。

本稿では、民俗面中の民俗面ともいえる「なまはげ面」をとりあげる関係上、その習俗のあらましを紹介し「東北の仮面」展の先駆けとする次第である。

Ⅰ　県内のなまはげ習俗

なまはげについては、菅江真澄の『牡鹿の寒かぜ』以来、多くの論考が発表されてきた[1]ところである。中でも、中村氏は全国的なレヴェル[2]で整理し、なまはげを小正月の来訪神の中に位置付け、その意義を説かれる〔1952：pp. 127～136〕など、比較的まとまった研究分野となっている。さらに、最近は、県教育委員会の手で『秋田県民俗分布図[3]』が編まれ、一層なまはげの分布状況が明らかになってきた。それを襲うように、男鹿市、若美町のなまはげ保存会では重要無形民俗文化財・なまはげの記録化がなされ[4]、ここに集大成がなされようとしている。ここでは主に前者・『分布図』のもととなった調査カードを中心に事例を掲げるとともに、雄和・岩城・仁賀保・金浦・象潟の5町の筆者らの調査記録をも記した。なお、〔　〕内の数字は別表の調査地区番号に対応し、氏名は調査者である。

事例1〔12・大館市真中上宅地　　日景　健〕

1月16日—ナマハゲ—

日時も詳しいことも忘れられているが、部落の七郎兵衛（シチロヘエ）と呼ばれている家の人が、正月に部落の家を一軒ぎり「ナマハゲだ」と言ってさけんで歩いたと言う。七郎兵衛と呼ぶ家は、もとは武士の出で、部落では古い家とされている。子供達が泣いたり、朝、寝起きが悪いと、ナマハゲが来るからと言った。

事例2〔33・峰浜村沢目水沢　　菊地利雄〕

1月16日—小正月—

16日の早朝、男の子は木製のシシ面をかぶり鳥追いの歌を歌いながら、家々を回り、餅・銭をもらって歩く。不幸のあった家の子どもは3年間出られない。

事例3〔40・八竜町釜谷　　戸松勇治〕

1月15日—小正月の年取り—

この日から生はげの行事が、青年たち中心に行われた。鬼の面をつけ、ケラを着た青年が家々をめぐり、「なまけ者、悪い嫁」をいさめて歩いた。

事例4〔41・八竜町鵜川字東鵜の巣　　同　前〕

正月中

主に子供中心に、各戸をまわり、男鹿のなまはげに似た行事をし、餅をもらい宿で焼いてたべた。

事例5〔42・山本町外岡字外岡　　同　前〕

1月3日—なごみはぎ—

「なごみはぎ」というのは「なまはげ」の一形式。なまはげのように面はつけないでケラを着、主に子供たちが演ずる（青年も少しは参加した）。「なごめこはげだが、はげだがよ、ほーじょことげだがとげだがよ、あずぎこ、にえだがにえだがよ」といいながら各戸をまわると各戸では切餅を出す。

事例6〔44・琴丘町鹿渡字高屋敷　　同　前〕

1月3日—なまはげ—

「なごめこはげだがはげだがよ、ほーじょことげ

だがとげだがよ」といって戸をたたくと、その家では切餅二、三切を子供たちに与える。

事例７〔46・八郎潟町夜叉袋　菊地利雄〕

１月15日―小正月の年取り―

夜、男の子がナマハゲと称して家々を回り餅をもらう。

事例８〔50・五城目町浅見内　渡部景俊〕

１月15日―小正月―

夜、ナモミハゲ。ミノを着、変装して大人が家々を回ってモチをもらう。

事例９〔54・昭和町大郷守字北野街道　瀬下三男〕

１月15日―ナマハゲ―

子どもたちが５・６人１組になってケラを着て顔をかくし、鈴を鳴らして家々を「ナマハゲきたよ、ナマハゲのガタガタ」と言ってまわり、切餅をもらって、あとで子どもたちでわけた。

事例10〔56・天王町天王　菊地利雄〕

１月15日―小正月―

年取りと同じ料理を作る。この日、村を「ナマハゲ」が回る。村の若者が数人で手作りの面をつけ、ケラを着て、家々を回る。子どもや花嫁をおどしたりいたずらをする。主人のもてなしをうけて、餅をもらって帰る。

事例11〔57・若美町福川字堅石福川　瀬下三男〕

１月15日―ナマハゲ―

３人１組になってやってくる。ほとんどはだしで歩いた。特に娘・嫁がいる家でははでにあばれまわった。渡部部落では15・16日と２日間ナマハゲが歩いた。そのため１日早く年取りを行う。ナマハゲの着たケラのワラを頭につけておればよくなるという。

事例12〔58・若美町宮沢　同　前〕

１月15日―ナマハゲ―

青鬼・赤鬼２人１組になって、各々の家をきめてゆき、酒などを飲み、餅をみやげにもってくる。餅はあとで分けた。

事例13〔59・男鹿市船川港椿　同　前〕

12月31日―ナマハゲ―

赤鬼・青鬼が１組になって西からと東からやってくる。そのあとから餅・酒などをもらう人がついてくる。ナマハゲにあげる餅はゆずりの葉、コンブなどでお膳をかざっておく。また、ナマハゲのケラのワラをひろっておき、病気の箇所につけると治るという。

事例14〔60・男鹿市男鹿中字三ツ森　同　前〕

12月31日―ナマハゲ―

31日の夜にワカゼが10～20人１組でやってくる。互いに交替し部落一軒ごとまわり、新しい嫁、若い娘がいた家ではそうとうあばれまわり、子どもらは１日中ガタガタふるえていたという。ナマハゲが入ってくる時はそろばんの音を出してくる。これは悪い子どものお尻にナンバ（とうがらし）をつける意味という。不幸のあった家や新築の家には３年は入らない。真山から来るものと信じられている。

事例15〔62・男鹿市戸賀字戸賀　木崎和広〕

１月15日―小正月―

夜に村の若者のなまはげがまわる（赤・青鬼面をつけた２人に餅背負いの３人１組）。

事例16〔66・秋田市浜田中村　菊地利雄〕

１月15日―小正月―

この夜、子どもたちが鬼の面をかぶり「はぐど、はぐど」といいながら家々を回る。この時、家々では餅を子どもたちにくれてやるが、この餅を食べるとかぜをひかないといわれた。

事例17〔69・雄和町椿川字鹿野戸　長谷川秀樹〕

１月15日―ヤマハゲ―

青年が鬼面をかぶり、ワラで作った着物を着て、ナタ、包丁などを持って大声で叫んで家々を巡り歩く。家の人は餅をヤマハゲにくれる。

事例18〔70・雄和町向野　同　前〕

１月15日―ナマハゲ―

（略）

事例19〔71・岩城町君ケ野字藤田他　斉藤寿胤〕

１月15日―やまはげ―

夕方、やまはげに扮した若者が各家々をまわって泣く子、悪い子をこらしめて歩く。やまはげの来たあとの家の中は、次の朝までそうじをしない。

事例20〔72・岩城町道川　瀬下三男〕

１月15日―ナマハゲ―

部落のワカゼがナマハゲになって１軒１軒歩く。ナマハゲにはナマハゲ餅をあげる。

事例21〔75・本荘市松ケ崎神沢　斉藤寿胤〕

１月15日―ナマハゲ―

（略）

事例22〔84・金浦町飛字飛ヶ崎　　伊藤茂雄〕

1月15日―年取り―

御馳走をつくり年取りをする。子供達はアマハギと称して赤い面、青い面をつけて各家々をまわり悪魔払いをし御祝餅をもらい焼いて食べた。

事例23〔83・仁賀保町釜ヶ台字堂の下　　同　前〕

1月15日―鳥追い―

男女別に学童が鳥追いをする。終ると各家々でキナコ餅を食べさせる。鳥追いは男女が1所にならないように巡る。男はユビンキビシキ、アカキギハットシタイロシタイロと叫ぶ。また、ほら貝を吹く。女はヨドリハイハイ、アサドリハイハイいつにき鳥は四十雀にきぞ頭はって火をつけて塩俵さぶつこんで佐渡島近けがら鬼ヶ島さぼてやれぼてやれと叫ぶ。わかぜはナモミハギ。小太鼓を持って各家々にトロトロと門付けて、各家々では切餅2箇くれる。

事例24〔86・象潟町上浜関字有耶無耶の関　同　前〕

1月15日―ホヤラボイ―

14日に小屋建てし、15日の朝早く焼く。その火を持参して家にたくと悪魔除けになる言い伝えあり。15日夜子供達がホヤラボイをして宿に餅とキナコを持って集り食べ、甘酒は宿でご馳走する。歌の文句、朝鳥ホイ夜鳥ホイ、どこの町の鳥ボイだ、長者どの鳥ボイだジャーホイ、ジャーホイ、いちにく鳥は四十雀にくいし頭はって塩つけて塩俵さぶつこんで鬼ヶ島にボテーヤレボテヤレ、鬼ヶ島がヤンダカラ佐渡島さボテヤーレボテヤーレ。

事例25〔飯田川町下虻川・昭和町豊川槻木[5]〕

1月15日

飯田川では「ナマハゲ」と言い、もらったものはそのグループの共同所有となり、あとで分け合ったり、出し合って一緒に食べたりした。豊川でもナマハゲといい、年令は比較的高年で10才位から20才～23才位までの男子がおこなった。頭と顔をかぶりものでつつみ、首と腰にワラで作ったトシナのようなものをまいた。

事例26〔秋田市土崎港[6]〕

旧1月14日―ナムミョウハゲ（ナモミョウ、ナモメコ）

頬被りや、首巻きで顔をかくし、あるいはその顔へ墨を塗ったりして、どこの誰か解らないように声を押し殺しながら、1軒1軒家の中へはいりこんでは、ナムミョウハゲダガ　ハゲダガヨ　包丁コ磨ゲダガ　磨ゲダガヨ　ソロバンコおけダガ　おけダガヨ　と口々に唱えた。……略……ほんとうのソロバンを、ガチャガチャさせてくるのもいた。そしてごほうびに「銭や餅」を貰うのが嬉しかった。…略…この風習は鬼の出ないナマハゲで、各地に類似的なのがあった。

事例27〔大内町岩谷[7]〕

1月15日―なまはげ―

暗くなると多数のナマハゲが横行し、各家々に入り、泣く子を探し回った。家々では餅を与えた。今も何人か出るようだ。

※大内町高尾でも同様である。三川のナマハゲは、ナモミハギと言い昭和40年代に男鹿のものを真似たもの。

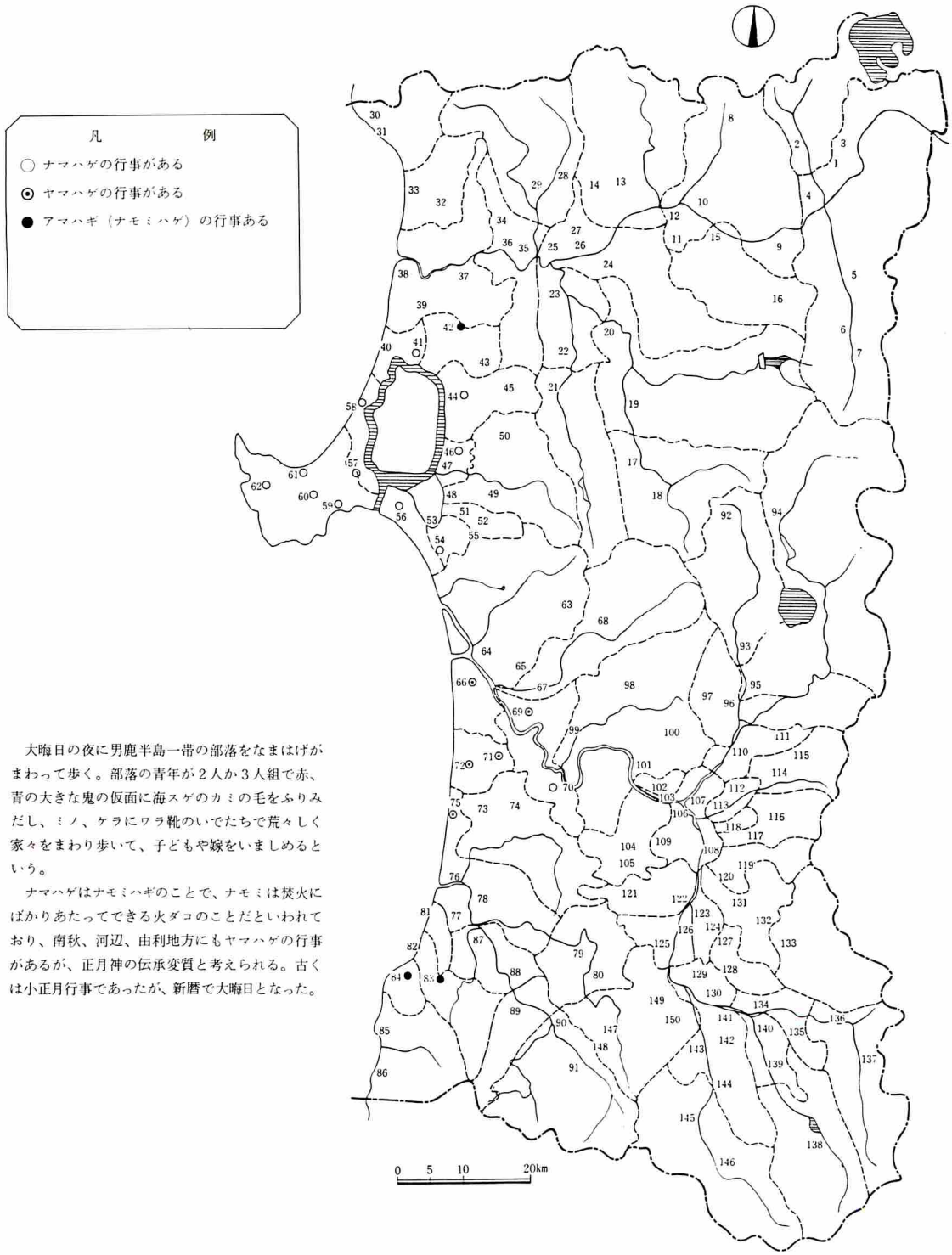
事例28　雄和町[8]

なまはげの行事は、小正月の年取りの日の行事として雄和町ほぼ全域にわたって行われていたもので、各地区ではそれぞれ盛衰もあったが、現在なお伝承されているものである。昔は若者が蓑を着て鬼面をかぶり、太刀を帯び、腰に注連縄を巻き、御幣と鈴を振りながら各家々を回るのが一般的であった。この行事は大正寺地区では悪魔祓い、戸米川地区ではナマハゲ、種平地区では悪魔祓い又はヤマハゲといい、川添地区ではヤマハゲと呼んでいた。

○相川地区

この地区は「カマクラゴンゴロー」という行事と一体となっていて、やまはげを行う若者（青年会）が15日午前にまず部落全戸を廻り各家から藁束をもらい集めてくる。それを部落入口方の田圃の中に長い杭を立て、その周囲に藁を積み上げ、高さ一丈以上にもする。夕方夕食をすませて部落の人々が集まった頃、1人がその藁の上にのぼり火をつける。そうして積み上げられた藁が、はやく勢いよく燃えてたおれると豊作といったり、またたおれる方角によってその年の豊凶を占った。この火にあたると無病息災で過せるといい、餅を持参して焼いて食べたりもした。このカマクラゴンゴローは隣部落でも行っていたので、よく競争をして燃やしたものという。焼き

なまはげ分布図[3)]



大晦日の夜に男鹿半島一帯の部落をなまはげがまわって歩く。部落の青年が２人か３人組で赤、青の大きな鬼の仮面に海スゲのカミの毛をふりみだし、ミノ、ケラにワラ靴のいでたちで荒々しく家々をまわり歩いて、子どもや嫁をいましめるという。

ナマハゲはナモミハギのことで、ナモミは焚火にばかりあたってできる火ダコのことだといわれており、南秋、河辺、由利地方にもヤマハゲの行事があるが、正月神の伝承変質と考えられる。古くは小正月行事であったが、新暦で大晦日となった。

おわると部落の人々は「サァ、やまはげが来るど」といって三三五五家にもどり、やまはげが来るのを待っている。このカマクラゴンゴローが終らないとやまはげは来ないと言われている。

やまはげは部落の集会所でケデやミノ、ハバキ、ワラグツにお面をつけ各家々をまわる。出発の前には全員でお神酒をいただき景気をつける。各家々ではやまはげの来るのを待っていて、お神酒と供え餅を用意している。やまはげは身内に不幸がある家には回らない。家に入ると親の言い付けをきかない童っ子、よく泣く童っ子、初嫁などを訓戒するものでそのかわりに餅、ミカン、干し柿などをタラに入れてもらってくる。この餅は、やまはげの餅といって食べると1年中風邪にかからないといわれる。現在は青年会員で行ない、やまはげの行事のみしか伝えられていない。

○湯野目・下黒瀬地区

湯野目地区は大分古くから続けられているが、下黒瀬地区は一時すたれたこともあったが復活している。この地区はともにやまはげと呼んでいて、山からくるものといい、神社または家付近の小屋の梁にもひそんでいると言われている。

この行事を行なうものは現在青年会員である。小正月の年取り（15日）の3・4日前にまず集まり、宿でケデ作りをする。昔はケラやナガレなどを用いたこともあったが、藁製のケデを多く用いた。ケデ作りの日に当日の打ち合せや、その他諸道具を借りてきたりして用意する。

15日は午後1時にいったん宿に集まり1時半から斎藤神主家（湯野目）で、やまはげに用いるお面全部、諸道具の包丁、まな板、タラ（米俵）、御幣棒などの他、このやまはげに参加する者は必ず御祈祷御祓いをうけることになる。この時、やまはげの御札を受けて、これを各家々を回るとき1枚ずつ配る。ここで直会のお神酒をいただき解散し、再び4時頃、宿に集合して着物をつけてやまはげに扮する。これが終ると最終打ち合せをし、全員でお神酒をいただき出発する。大体2組に分かれて5時頃の出発となる。まず最初は必ず斉藤神主家に全員入り、全戸回りおわって9時頃になり宿につく。

各家々ではやまはげの来るのを待っていて、床の間にお神酒と餅や供物を供えておく。やまはげは1種の悪魔祓いと考えられていて、願われれば持っている御幣で祓いもする。やまはげのケデから落ちる藁くずは次の日の朝まで絶対に掃かないし、終った時にケデは部落の入口や辻々の木や電柱にしばりつける。

やまはげにはそれぞれ名前があり、館ノ下のバラザエモン、岩沢のイワコ、田ノ沢のタッコ、野田の一円、下沢のシタコ、向山のガンコギといった地名に付された名前がつけられている。このやまはげは身内に不幸があった家に入らないし、やまはげにもなることはできない。昔は湯野目のやまはげが下黒瀬に行ったり、秋田市下浜の八田、石崎、赤坂などまで出ていくことがあり、やまはげの御札もこの範囲で配られている。

全戸を回り終れば、宿で直会をして解散となる。

○平尾鳥—ゲボシ

小正月15日夜のナマハゲは青年会が行っている。かっては子供組が中心であったという。雄和町ではほとんどがヤマハゲと称しているが、ナマハゲと称してきた。平尾鳥川沿いの竹花・中田・西野、中村・金井田・細田、中山・築場・善知鳥の三地区にわけ、3～4人で各家々を訪問する。

この地区ではワラでつくった“ゲボシ”を用いてきた。このゲボシは山形県の“かせどり”と類似したもので、仙北地方の冬の被りものケボッチに相当するものである。ゲボシには角がつく。1本角と2本角がある。その由来ははっきりしないが、古老の話では男女の別があったらしい。頭からかぶりこみ顔面をおおい、腰までたれこんでいる。腰ミノ、ハバキをつけワラグツをはく。

手には幣束をもつ。この地区では小正月の悪魔祓いとして迎えている。なかには、屋敷境にまで出て迎える家もある。一人一人をナマハゲはお祓いし、その後に子供たちの怠けをいましめ、モチなどをいただく。かっての子供組は子供小屋で夜食として食べたという。ナマハゲが終ると装束は雄物川に流したというが、現在は保食神社や近くの氏神に納めている。

最近、ゲボシも少くなりケデの様式に変ってきている。わずかに角田久氏（昭和9年生）らがその技

術を伝えているにすぎない。。

事例29・岩城町

○滝俣

1グループ4～5人で歩き、子供たちの組とワカゼたちの組とがあった。手ぬぐいをかぶり、木製の面やユウガオを半割りにしたものに目・鼻・口を描いたり、髪には馬の尾の毛や紙を貼ったものをつけた。背にはケラを着て、ワカゼが編んでくれたケンベエアを両肩から腰にまわしておおった。また、首からは、桜の枝を割って笹の葉をはさんだ鳴りものを下げ、吹きながら歩く。右手には幣束を持ち、左手でスマシ袋をになういでたちで、「悪魔はらい」と言って歩いた。戸口で笛様の鳴りものを吹くと家人が戸をあけた。玄関をまたぐ時に「泣ぐ子居ねが泣ぐ子居ねが」と言って入り、家人が出てくると幣束ではらい、帰り際に、シナ餅と白い餅を1コずつもらって帰る。

子供たちは日暮れから1時間位で終り、夜はワカゼ達が歩いた。主に初嫁の家を中心とすることから、俗に「嫁ハグに行く」と言ったものだ。初嫁にとっては災難の日とも思われ、雪がこいの陰に隠れたりするが、発見されるとさまざまな悪戯があった。そんな時、家人はナマハゲをなだめるように「サーサ、どうか、一杯飲んでくれ」と中に入り茶間に請じ酒をすすめたりした。

佐々木家のナマハゲ面は、先代（明治4年生）が幼少の折、君ケ野から手に入れたもので、以前は土蔵に保管され、正月しか出せないものであったという。子供心に、ナマハゲは、近くに居るものではなく、どこか遠方から来るものと思っていた、という。

15日は、福の神の来る日といわれ、この日の来客は福の神として迎えられた。

○勝手

ヤマハゲと呼び、現在は子供の楽しみごととなっているが、もとは青年の行事として行われていた。グーグーという竹で作った笛を吹きながら回る。鬼の面をかぶり、ケダという〆縄状のものを両肩から腰にまきつけて体を隠し、足の方はサンペやワラグツをはく。15日の夜、3人から5人位のグループで家々を回る。各グループにはそれぞれ1人の餅背負い役が同行し、餅背負いだけが面をつけずに鉦を打ち鳴らす。鉦の音が聞こえると家人は戸を開け、「待っていた、よく来てくれた」など言い請じ入れる。初嫁の居る家では相当の悪戯・暴言があった。ヤマハゲは山から来るものと考え、山の中に居て、いつも行いを見ていると感じていた。特定の宿はなく、ケダを編む場所（小屋）を宿がわりにしていた。回り終えてからもそこで餅の分配などした。

○亀田

亀田では、子供の行事で、中には大人でやる人も居たが、古くは行われていなかったのではないかと思われる。もともとは旧の15日の鳥追い行事が盛んであったが、鳥追いにつきものの火が大火につながることから寛政8年以降は藩令により禁止され、その後ヤモメハゲが鳥追いにとってかわったと推測される（写真①②）。

また、昭和25～26年の調査では、上蛇田・赤平などでヤモメハゲがあった。その当時は、桶を叩いて、その桶の中にもらった餅を入れて歩いたり、上蛇田ではヨメイジメをやったことなどが調査できたようである。

事例30・仁賀保町

水沢部落（11戸）では15日夜、鳥追いに歩く。定宿となっている遠田家には、「高砂」と称する面が代々保存されていて、この二面を鳥追いにはつきものとして現在なお使用されている。この行事は古来より子供の行事として伝承され、面をつける子供は小学校1年生と決まっている。面をつける子供は、当日、正装し新しい手拭いを持って遠田家に来る。そして、手拭いを神明様に捧げ拝んでから面をつけ手拭いで面の上部をしばる。鳥追いにまわる時は拍子木・太鼓・ジャガ（手平鉦）を持ち、鳥追いの唄をうたいながらまわり、先頭は面をつけた二人で、年長の者がこの二人の手を引いて（雪道に足をとられないように）歩く。各家々では神明様に灯りをつけ、今か今かと待ちこがれている風があり、厄払いと感じている。面をつけた二人は各家々の神様を拝み、次へ移るといった単純なものでその間、他の子供は家へ上がらないで待っている。昔は餅などをもらったり、また家々でもあげたりはしなかったが、近年はミカンなどをあげる家もみられる。こうして各戸をまわると、遠田家に戻る。そして遠田家では

手製のササアメ・ナマス・ゴボウ・甘酒などを出し労をねぎらい、カルタなどの楽しみごとをやり、夜10時頃帰宅する。鳥追いは3番鳥まであり、2番目に各家々を拝み回るのである。

なお、水沢ではアマハゲと呼び、15日の夜、宿をきめて集り、嫁ツツキに歩いた。ツツキ棒は子供が手ずから作るもので、当日はそれをかついで初嫁の家にあがり込み、床が抜けるほどとび跳ね、嫁をつついた。嫁つつきが終わると嫁の御酌で御膳をごちそうになり餅をもらって帰った。

また、中野でもアマハゲと呼び、「初嫁どご尻たぐるに行く」と行って、ツツキ棒（タラの木と紅白の紙）を持って子供が回った。このアマハゲは、15日に小屋を建て、その日にその小屋を焼いたあとで歩くもので、鳥追いはアマハゲの後に行う。ここでは塞の神を祀るところに小屋を建てず、田の中に建てる。

なお、平沢・伊勢居地でみられたという〔早川、：p40〕[1] 灰を顔に塗り各家を踏み歩く例については、大竹部落でのことを若干知り得ただけであった。

事例31・金浦町

○金浦

金浦町金浦の通称・北向いの佐藤ヨエモン家（吉兼氏）には赤と緑のナマハゲ面が伝えられている。佐藤家はもともと飛部落に住んでいたといい、飛在住の頃より面があったもののようである。いつ頃の作かはっきりしないが、浄光寺建立の際に同形の面を寄進したと言われるところから、江戸の末頃と考えられている。事例22の「赤い面、青い面」とあるのはこの面のことで、佐藤家の移転後は飛部落から毎年佐藤家に借りに来たものという。飛でも一時ナマハゲを中断したことがあったが、そうした折に塩神様（塩釜神社）が焼けたりしたため、再びやるようになり、10年前に借りに来てからはこなくなったようである。この面は平常は神明様の奥に蔵されていて出さず、15日の昼頃までに箱から出しておいた。飛からはその折に借りに来て、返す時はナマハゲの際に頂いた餅や馬の尻毛などで繕って返しに来たという。しまうのは20日正月の餅を供えてからであった。

○赤石

小正月から20日までの間に御寺礼をする。15日の昼食が小正月の年越しに当り、食べ終わるとサエの神の前でワラ束を焼き、部落の人がその火にあたり1年間の無病息災を祈る。それが終ってから子供たちが宿に集っていく。アマハゲは小・中学生が中心で、宿は御保呂（オホロ）さん（鎮守・保呂羽山）の大当番（オトウバン）の家になっている。午後4時近くなってから各戸をまわる。各戸ではアマハゲにあげる餅を用意しておく。また初穂料も頂く。宿に帰ってから明け方まで3回の鳥追いがまわったから、その際は宿に泊まり込んだ。

アマハゲは顔に墨を塗り、〆縄状のものを体にまきつけ、頭からすっぽり帽子をかぶった格好である。各戸には上がり込んで、小太鼓とジャガ（手平鉦）を叩いて、ワーワー叫び御祓いする。小・中学生が一団となってやってくるが、墨を塗るのは年長の2人だけで、この二人が家に上がってとびはねる仕草をする。また、各家への道中では、「アマハゲ来たや、ジェン（銭）だら十文、酒なば1升、シナ餅（黒餅とも）要らね、いい餅（白餅とも）用だ」とはやしながら歩いた。

アマハゲが鬼といった感じ方はない。

事例32・象潟町[9]

象潟町の上郷地区は、ことに塞の神信仰の盛んな場所柄であり、小正月行事の主要な部分をしめている。8日のノサ集めに始まり11日の小屋建て、15日の小屋焼きとモチアイ期間の大部分を塞の神ごとに費している。横岡部落の例では、小屋で寝迫りしたあと15日朝の小屋焼き以後は特定の家を頼み宿としそこから16日の明け方近くまで3回の鳥追いが行われる。中でも2回目の鳥追いは、各戸をまわるほか初嫁・婿の家をもまわり、初嫁・婿から直接餅をもらうものである。これを「アマハゲ」と呼ぶのは、上郷地区では一般的なことのようである。なお、鳥追いに関する歌は以下のようである。

—鳥追い（部落を巡る時の道中唄）—

朝鳥ホイホイ
夜鳥ホイホイ
これ（鳥とも）は何処の鳥追いだ
長者殿の鳥追いだ
一にぎ鳥はシジュウガラにぐす

頭叩って塩つけで
塩俵さぶぢごんで
佐渡ケ島さ追ってやーれ、追ってやーれ
佐渡ケ島近けならば
鬼ケ島さ追ってやれ

—塞の神の唄（道中の四ケ所にある塞の神の小屋の燃え跡での唄）—

塞の神のマラは1尺8寸長まった
さぎゃ　きりきり　きんのんだ（きんのーどとも）
中　べんごす　山形
山形のがぎゃだ　はねる木（はねの木とも）
切ったぎて
テデマラ　柔っけゃすて
1文銭で鉛買って
2文銭でマラ買って
くっつけ　くっつけたば（押っつけ　吹っつけ　吹っつけだばとも）
其処のアバ喜んだ
ブホー　ブホー（木桶の擬音）

—餅もらいの唄（2回目の鳥追いの時、門口に入ってからの唄）—

アマハゲのポンポラポン
てんきゃとのにきにき　餅をくれ　餅をくれ

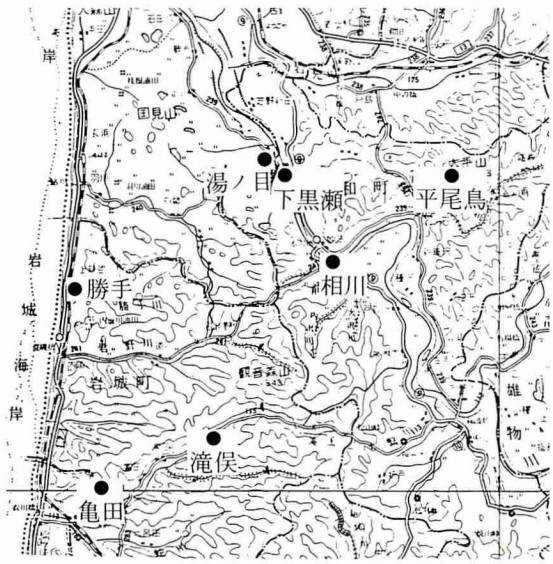
—初嫁（婿）の家での詞—

「初嫁（婿）出はれ」と出て来るまで囃す。出て来ると「突つくは今だ（じぐるは今だ）」と囃し、初嫁（婿）から餅をもらう。

一方、同地区大森部落でも小屋焼き後、3番までの鳥追いをやり、ここでは1番鳥の際にアマハゲの唄を歌いながら餅もらいに歩く。ここでの特徴は、初嫁棒を肩にかつぐとともに、塞の神様とか隠居とか呼ぶ塞の神の形代を持ち歩くことである。各家々に入ると形代を茶の間に投げ入れて、塞の神の到来を告げる。すると家人がそれに手を合わせ拝み、餅をさし上げるといったふうである。また、初嫁（婿）のある家でも同様であるが、横岡同様、初嫁（婿）出はれと出てくるまで叫び、いざ出てくると、突つくは今だ、ととびはね、初嫁棒で突きはじめるのである。昔は、正装した嫁・婿の衣服が突き破れるほどの仕業だったといわれる。この後、家人がなだめに入ったりして、嫁・婿の正式な接待を受けて他へ回るのである。

また、石名坂では、昼頃に小屋を焼き、夕方にかけて鳥追いに出る。他と同様「アマノハギ」にも歩く。鬼の面をかぶり、ケラを着、ハバキをはき、袋と包丁を持って餅もらいに歩くのである。

小滝では、現在1グループが歩くだけであるが、昔は何グループもあったようである。小滝番楽の「大江山の鬼」の面2面はよく使われたが、それ以外には紙で作った面や顔に墨を塗ったりして歩いたようである。ケラを前後につけ、包丁とかマサカリのつくりものを持ち歩き、「アマノハギ来た！」と戸の口をあけ、家人とのやりとりをしたそうであるが、今は突然やって来て（前もって、来てくれるように頼んであるためか）子供を驚かすのが主になっているようである。アマノハギは「お宮のポッポラ杉」から来るということが言われ、ききわけが悪い



筆者の調査地区　①

と「アマノハギさおしえるぞ」といったりしたそうである。

以上、粗略ながら、最近の新資料をまとめた次第である。なお、右表は男鹿の一部地区（昭和52年調査）と由利地区との各要素を比較したものである。

地名	名称	月日	年令層			装束			唱え言	唄	悪魔払い	嫁突き	持ち物			
			大人	青年	子供	仮面	鳴り物	スミ塗					包丁	桶	棒	その他
男鹿市男鹿中字家の下	ナマハゲ	1月15日		○		○			○				○		○	
〃 〃 家口	〃	〃		○		○			○				○			
〃 〃 滝川	〃	〃		○		○			○				○			
〃 〃 島田	〃	〃		○		○			○				○			
〃 〃 開	〃	〃		○		○			○				○			
〃 北浦字入道崎	〃	〃		○	○	○			○				○	○	○	
〃 〃 湯ノ尻	〃	〃		○		○			—						○	
〃 〃 湯本	〃	〃		○		○			—				○	○	○	
〃 〃 野村	〃	〃		○		○			—				○		○	
〃 〃 真山	〃	〃	○			○			○							大福帳
〃 〃 杉原(1区)	〃	〃		○		○			—				○	○		
〃 〃 北浦(2区)	〃	〃		○		○			○				○			
〃 〃 北浦新道(3区)	〃	〃		○		○			○						○	
〃 〃 相川	〃	〃		○		○			○						○	
〃 戸賀字戸賀	〃	〃		○		○			○				○	○	○	
〃 〃 浜中	〃	〃		○		○			○				○	○		
〃 〃 塩浜	〃	〃		○		○			○				○	○	○	
秋田市土崎港	ナムミョウハゲ	1月14日			○		○	○		○						
雄和町相川	ヤマハゲ	1月15日		○		○					○					御幣
〃 湯野目・下黒瀬	〃	〃	○	○		○					○					〃
〃 平尾鳥	〃	〃			○	○					○					〃
岩城町滝俣	ナマハゲ	〃		○	○	○	○		○		○					
〃 勝手	ヤマハゲ	〃		○		○	○		○							
仁賀保町水沢	アマハゲ	〃			○					○		○			○	
〃 〃	(トリオイ)	〃			○	○	○			○	○					
〃 中野	アマハゲ	〃			○					○		○			○	
金浦町赤石	〃	〃			○		○	○		○	○					
象潟町横岡	〃	〃			○		○			○						
〃 大森	〃	〃			○		○			○		○			○	

各要素にみる男鹿と由利との整理表

Ⅱ 課題として

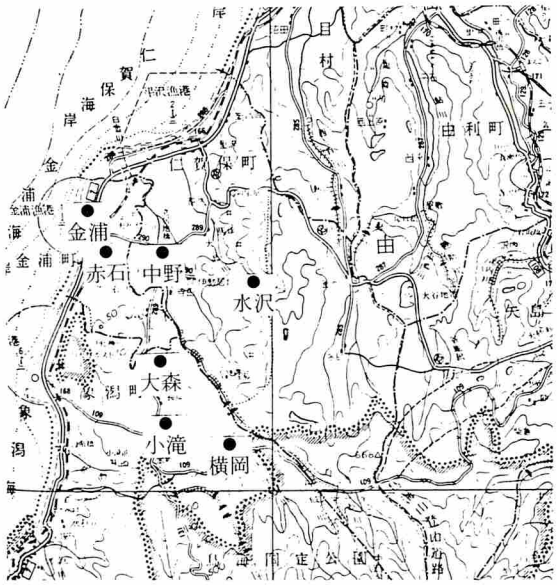
岩手県の場合は、明確にカセドリ系とナモミ系の対比を見せ、前者は厄落しに特色があり、後者は仮面をつけることに特色があった〔矢野、1970：p.40〕。また、カセドリ系が生産の予祝的傾向を持ち、内陸部に分布するに対し、ナモミ系はカセドリよりも神聖視されるとともに妖怪として受けとめられ、海岸部を主とする〔同上：p.42〕と報告されている。

一方、山形県の例は江田〔1976：pp.15～21〕によってまとめられ、本県の平尾鳥のゲボシや由利の例とも比較できるものであった。

本県における由利郡―仁賀保・金浦・象潟―の三町は例外的とも言える塞の神の濃厚に分布する地域であり、小正月行事と深い関係をもっている。全国的にみ

れば、新潟・長野両県に濃厚であり、新潟県での主題は、サエノカミの神棒を作り、重ね合わせ、小屋におさめ、子供がこもり、そして燃やすという一連のものである〔脇田、1973：p. 74〕。さらに、これら両県を北進乃至は南に行くにつれて、鳥追い小屋との結びつきやトンドなど火祭りとは無関係になる〔同上：pp. 74～75〕というものでもある。因みに新潟県の報告は、若者と子供等が主体になり、各家から藁・門松・〆縄・お札を集め、法螺貝を吹きながらシンギを切りに行く。シンギの周囲に藁など集めたものを縄でしめて大きくする。そして、ドーラクジン（道祖神）のお爺さん、お婆さんを藁で作り、正面に飾り、それに火をつける〔金塚、1939：p. 19〕ものや、サイノカミヤキ（斎の神勧進）夕方部落の子供が注連を集めて焼き、この火で餅を焼いて食べる。「サイノカミノオンマラハ、ニシン汁（あるいは出雲崎へ）ニヨバレテ、アトデ家を焼かれた」と呼びつつ注連その他神に供えたものを焼く〔剣持、1938：p. 48〕といったふうである。これからすると、少なくとも象潟町上郷地区の塞の神との共通する点は多いようである。なぜ、県内のこの地区にのみ塞の神が多いかについては、まだまだ不明な点が多いが、天然の良港に恵まれた由利三町の地理的特徴を抜きにしては考えられず、北陸地域との交流をものがたる一資料として捉えたい。磯村に拠れば、北陸との交流を証拠づけるものは多々ある〔磯村、1980：pp. 1～43〕といわれるから、今後はそうしたダイナミックな視点をも合わせ考えたいものである。

また、象潟のアマハゲは鳥追い行事との複合著しいものであったが、山形のカセドリについても一部同様のことがあるようである〔江田、1977：pp. 22～23〕。すなわち、鳥追いの類型として掲げられた、A）部落行事として行う型・B）家毎の行事として行う型・C）子供たち（または若衆）が部落内をねり歩く型・D）子供や若衆が家々を訪れる型・E）「鳥小屋」などと呼ぶ小屋をかける型の内のD型がそれである。しかし、本県の場合、就中、上郷地区の場合、CとDは一連の行事としての性格が強いところから、ただちにこれをD型と把握できないと考える。また、羽後町三輪野中・稲川町川連・湯沢市須川相川など内陸部の様に雪中田植えの場所で行うところや、もっぱら個人の家ごとで行う鳥追いなどあり、今後鳥追いについては山形の5型とも考え合わせ整理すべきことと思われる。



筆者の調査地区　②

おわりに

前掲表及び各事例にのっとってまとめておく。

年令層と装束からみれば、青年と仮面との結び付きが強く、と同時に包丁を持ち歩くことが男鹿を中心とするナマハゲの典型とみられるが、古くはタラの木の棒（シャクジョウ、ゴヘイともいう）を持つものであったと思われる。しかし、雄和町のヤマハゲにみられるように、包丁を持ったにしても、悪魔払いを明確に意識されるものではなかったと思われる。男鹿では早くから威圧性を帯びるようになったとみえ、これには五社堂や真山に伝わる武帝伝説における随従鬼が影響を及ぼした〔大槻、1977：p. 260〕と考える。さらに、修験者の柴燈祭に関与した結果〔木崎、1977：p. 260〕でもあろう。ともあれ、ことごとく鬼の威圧性をいう中にあって、真山のごとく、決して鬼ではなく、角もない、赤神の使いという感覚があることも事実であるから、尊い神が家を訪れ訓戒を垂れるわざおぎであったのが、後になって子供しかおそれおののかない行事となった〔柳田、1973：p. 252〕例であろう。つまり、鬼面の使用は訓戒から威圧への変化であり、面相が鬼となっているのはあくまで後の改変〔宮本、1970：p. 195〕ということである。小正月に訪れ来る神は異形を

強調するにつれ鬼面を獲得し、妖怪もどきの性格へと変容したようである。

一方、由利でのアマハゲは、子供を主体として、小正月のみに許された唄を歌いつつ、鳴り物をならし、家々をめぐり、初嫁・婿へのきびしい予祝を行うものであった。小正月が子供の日であり、道祖神の神主として、女のよく孕むような年は作物も良い〔柳田、1973：pp. 235～236〕とばかりに。塞の神は、性神的要素が強く、性的な儀礼を含む場合が多い〔宮田、1976：p. 161〕ことは当地区の事例をみても明らかである。そして、それは、小正月の農耕祭的要素が加味されていた〔同前〕ためでもある。小正月の子供の権能を頼りにした由利では、仮面の着用には至らず、塞の神行事として伝承されているといえよう。

以上、これらの対立すべき点は、下野に拠れば〔1978：p. 190〕悪神と善神の二元論として把握されるようであるが、こうした御説を踏まえて更に精査したい。

また、なまはげ習俗が秘儀的に行われた加入儀礼であったと想像される〔三崎、1978：pp. 75～76〕点についても、アマハゲにおける塞の神小屋での子供組の秘儀性を通して検討を加えたいと考える。

おわりに、御協力いただいた下記の方がたに深く感謝申し上げる。

秋田市	角田　正	岩城町	和田吉之助
雄和町	平尾鳥青年会		那須春弥
	斉藤寿胤		渡部専一
	角田　久		佐々木萬右衛門
	鶴ヶ崎神社		菊地与吉
	湯野目青年会	仁賀保町	本堂俊夫
	下黒瀬青年会		遠田嘉男
	相川銅屋青年会		伊藤吉円
	山崎青年会		斉藤喜市
	藤原重一郎	金浦町	斉藤武司
	佐藤藤美		伊藤　覚
象潟町	遠藤蔵之助		佐藤吉兼
	横山正義		
	富樫　寛		

註

1) 早川孝太郎　「灰で顔を塗った神」『ドルメン』1－2。p. 40
　伊能嘉矩　「ヒガタタクリの風」『人類学雑誌』34－1。pp. 29～30
　三浦隆次　「秋田県船川のナマハゲ」『民族』1－2。p. 168
　中村善之助　「羽後の悪魔払い」『民族と歴史』2－3。p. 51
　高橋文太郎　「男鹿のナマハゲ」『旅と伝説』14－3。
　今村泰子　「秋田県の歳時習俗」『東北の歳時習俗』明玄書房
　上記のほか、多数あるも省略す。

2) 中村の分布図のほか、柳田国男監修になる「小正月の訪問者　分布図（『年中行事図説』1953）」や『歳時習俗語彙』（1939）、下野敏見「おとずれ神」（1978）が掲げられる。

3) 1979年3月、緊急民俗資料分布調査報告書のサブタイトルを持ち、文化財調査報告書第66集として編まれた。

4) 『記録男鹿のナマハゲ』第1集（1980・3）、男鹿のナマハゲ保存会編集・発行。全59頁。

5) 『正月展の技折』（1965・1、方上地方文化研究会発行・ガリ版）に拠る。

6) 『土崎史談』12（1971・10、山崎ふっさ筆）に拠る。

7) 『大内町文化財資料第1集　年中行事』（1976・5、大内町教育委員会）に拠る。

8) 平尾鳥地区を除き、雄和町・斉藤寿胤氏の資料提供による。

9) 拙稿「象潟町横岡のサエの神」（『日本民俗学』110号）

10) 註4の原稿に拠る。

文　献

江田　忠　1977「山形県にみる『鳥追い』の行事について」『山形県民俗・歴史論集』第1集　東北出版企画

〃　1976「山形県にみるカセドリの習俗について」『東北民俗』10　東北民俗の会

磯村朝次郎　1980「秋田沿岸における日本海的人文要素について」『秋田県立博物館研究報告』5号　秋田県博

金塚友之亟　1939「地言葉と農民生活（15）（年中行事編）」『高志路』5巻1号　高志社

剣持準一郎　1939「正月吾が家の行事（南魚沼郡土樽村土樽）」『高志路』5巻2号　高志社

北野博美　1973『年中行事』臨川書店

木崎和広　1977「男鹿半島の近世在地修験について」『東北霊山と修験道』名著出版

三崎一夫　1978「小正月のまれ人」『講座日本の民俗6　年中行事』有精堂

宮本常一　1970『宮本常一著作集9　民間暦』　未来社

宮田　登　1976「暮らしのリズムと信仰」『日本民俗学講座』3　朝倉書店

中村たかお　1952「なまはげ覚書」『民族学研究』16巻3・4号

大槻憲利　1977「男鹿本山・真山と山麓の修験道」『東北霊山と修験道』名著出版

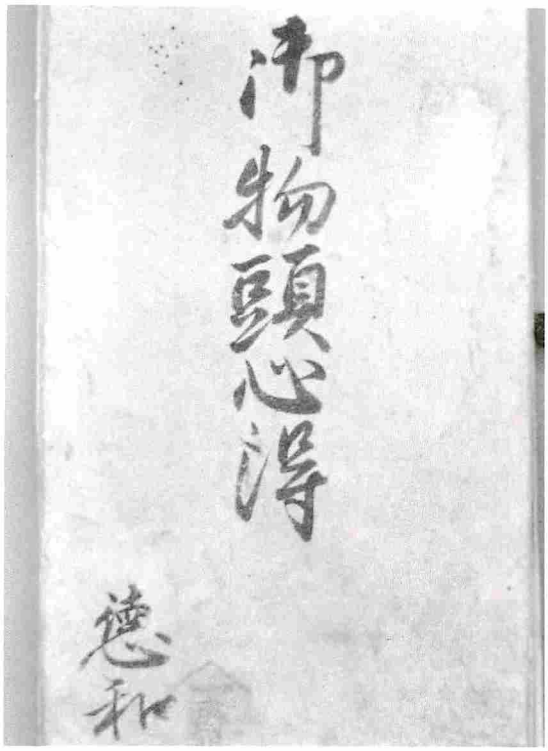
清野久雄　1977「庄内塞の神祭資料」『山形県民俗・歴史論集』第1集　東北出版企画

下野敏見　1978「おとずれ神」『講座日本の民俗6　年中行事』有精堂

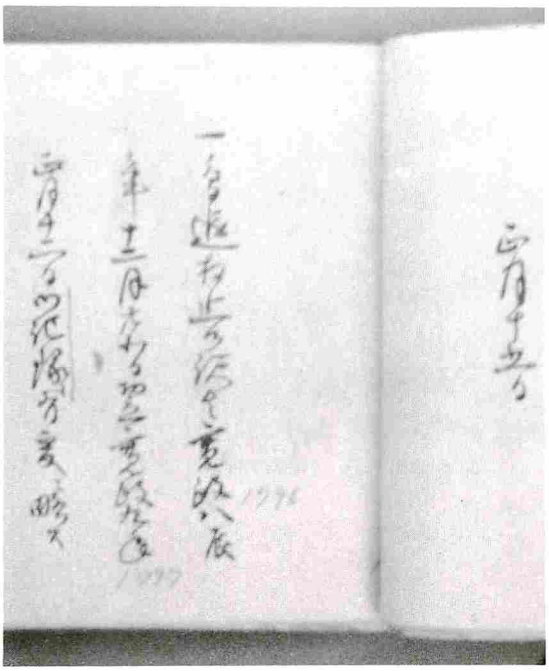
脇田雅彦　1973「サエノ神信仰と小正月行事」『日本民俗学』86　日本民俗学会

柳田国男　1973「新たなる太陽」『定本柳田国男集』13巻　筑摩書房

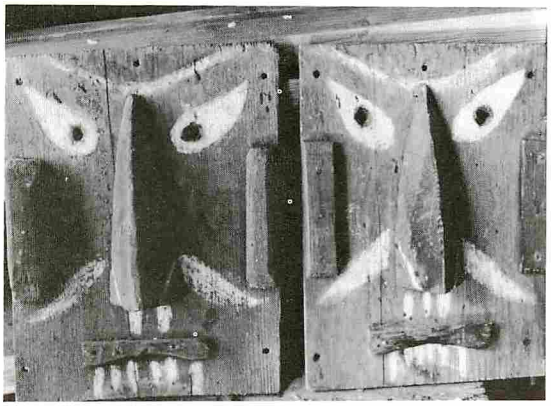
矢野黎子　1974「カセドリ」『日本民俗学』95　日本民俗学会



①「御物頭心得」(岩城町)



②「同 上」正月15日・鳥追廃止の条



③ 岩城町君ケ野のタラ面の変化したもの

④ 同 上 ナマハゲ面

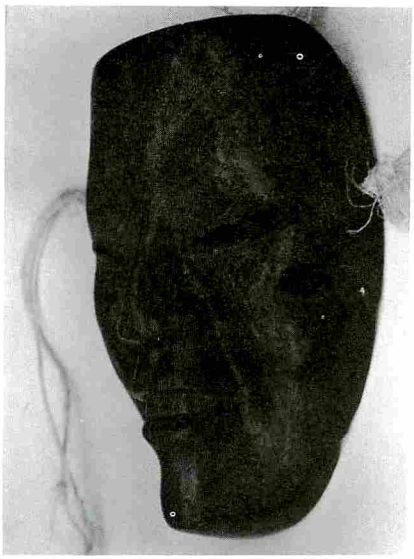
⑤ 岩城町滝俣

⑦ 同　前

⑥ 金浦町金浦

⑧ 金浦町赤石・神棚の前でとびはねる

⑨ 同前・顔に灰を塗ったアマハゲ



⑪ 同　前

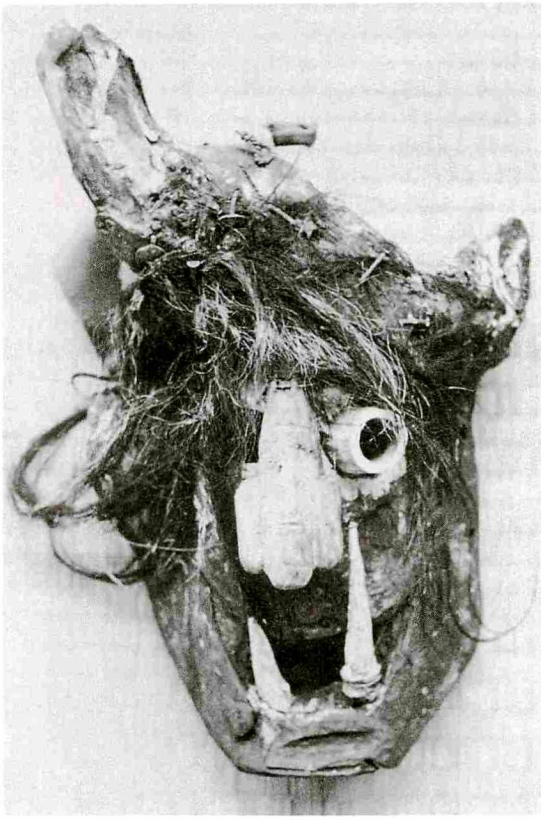
⑩ 仁賀保町水沢の鳥追い面

⑫ 象潟町小滝のアマノハギ面

⑬ 同　前

⑭ 同　前

⑮ 象潟町石名坂のアマハゲ面



⑯ 同　上

⑰ 同　前

⑲ 石名坂の塞の神小屋

⑱ 横岡の鳥追い・塞の神の小屋跡にて

⑳ 大森・隠居様（塞の神の形代を拝む）
— 象潟町・横山正義氏撮影 —

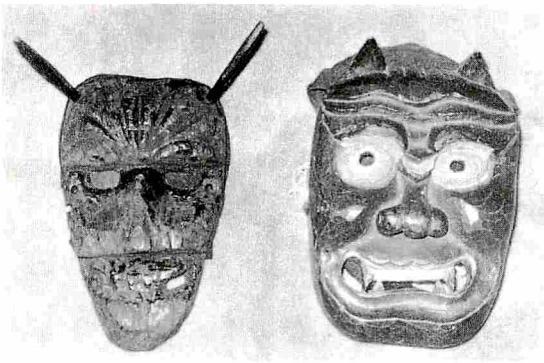
㉑ 大森・初嫁棒を持ってとびはねる

㉒ 大森・嫁つつき
— 象潟町・横山正義氏撮影 —

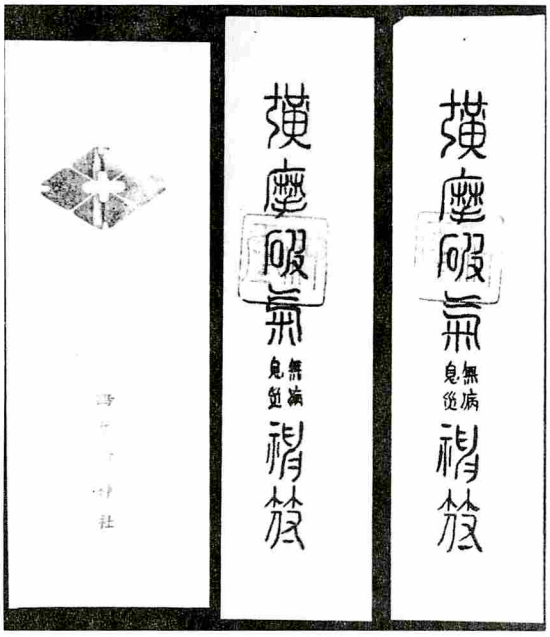
㉓ 雄和町平尾鳥・ゲボシ姿のヤマハゲ

㉔ 同上・悪魔払い

㉕ 雄和町湯野目・祓いの神事



㉘ 雄和町湯野目・ヤマハゲ面



㉖ ヤマハゲ お札と袋

㉙ ㉗に同じ

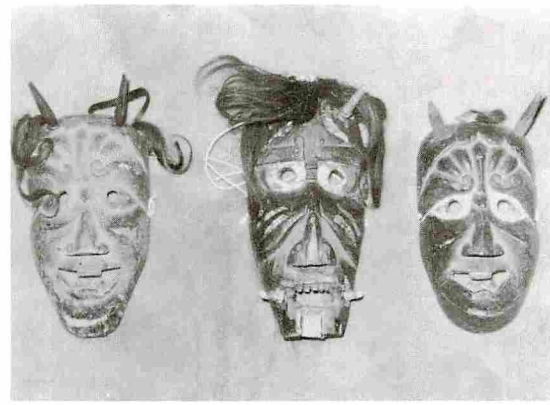
㉗ 雄和町下黒瀬・ヤマハゲ面

㉚ ㉘に同じ

㉛ ㉘に同じ

㉝ ㉘に同じ

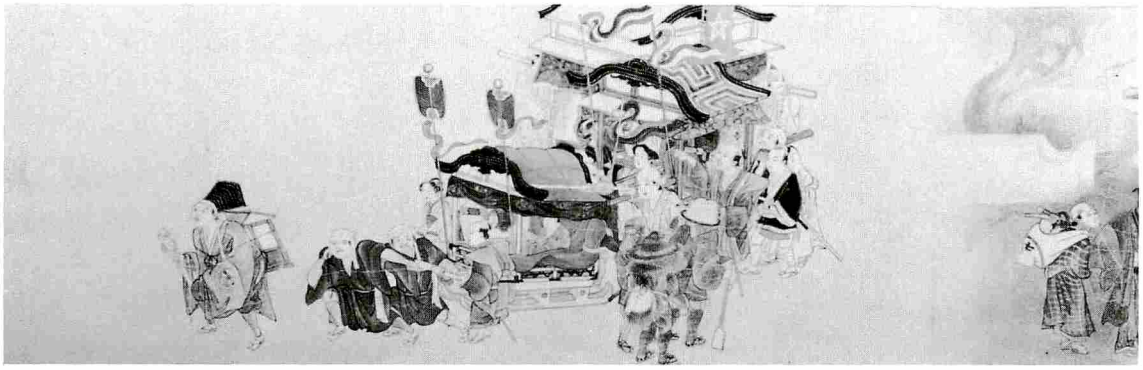
㉜ ㉘に同じ



㉞ ㉗に同じ

㉟ 雄和町田草川字山崎・タラ面（藤原重一郎・佐藤藤美氏製作提供）

参考 —「秋田風俗絵巻」より —

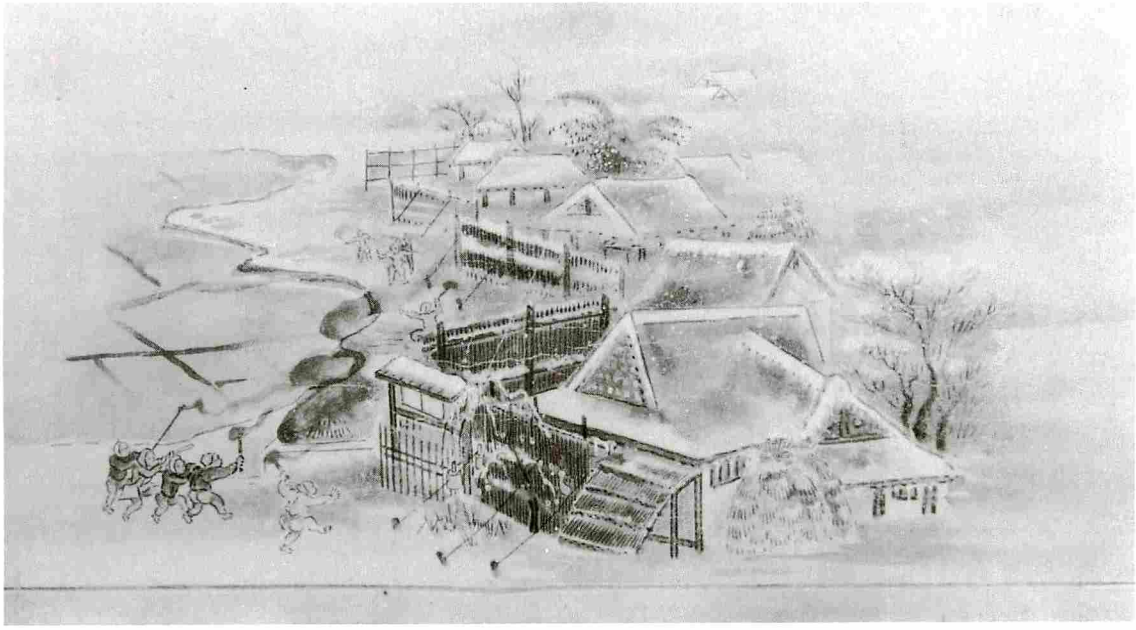


—さえの神—

天明９年
15日、さえの神祭日とて、町ごとにわらはふたりづゝさうぞきたてゝかしづくことかぎりなし、わらはのとし八こゝのつ十あまりをかぎりて、えらびものす、にしきあやなどの頭巾、衣もおなじさまにて、赤きはかまをつけ卯杖つきて、ことぶきのことばいひつづく、年ごとにさだまりてある事なり、その日はのりもの、又はそりなどにのせてうちぐし、城にまうのぼり、つかさつかさの家など行めぐり、かへりきて酒さかなもうけしたしきかぎりつどひてことぶきあへる事とぞ
（『雪のふる道』津村正泰筆、Ｓ３：『未刊随筆百種第20』米山堂、p.48）

—かまくら—

天明九年
またかまくらとて、十四日は雪をあつめて、かまどをつくり、門松をつみてたきあげ、その火をたはらやうのものにうつしとりて、町のほどをふるひありき、人の家にもなげ入れてことぶきなりとてさわぎのゝしる、俵を竿などにさしあげてうちふるひ行ひがふは、よるのほかげはしたなきものから、中々やうかはりてめづらし、町ごとに火をたきつづけたれば、けぶり立そひて、十四日のよひは空もあかふくゆりあひたり、雪のかまどは町ごとにかならず一所あり、家より高うよもをかこみてつくり、四五日まへよりかまへ出てゝ、かまくらをこなふとて、よるも人その内に入ふし、竹をきりてをづのとなし、ふきならしあかす、ひなの手ぶりいとあやしきわざにこそ、つとめてあづきのかゆすゝめたるなん、故郷にかはらぬ心ちするかし、
（同上、pp. 48～50）



—鳥 追 い—